

第26回 Kozoom テーマ 「米寿の夢」に思う

清水健二

我々同期生は今年米寿になる。人生の終末期に入って尚、「夢」を追うテーマを提案された方に、改めて若さとロマンを感じその逞しさに敬服した。私も元気をもらって夢を語ってみようと思う。

少年、青年、壮年時代には夢を懐いてきたが、歳を重ねる毎に夢は薄れて行き、現実の厳しさと思い通りにいかないことを認識しながらも、少しでも近づきたい想いは持ち続けて来た。そして今も捨てるはいけないと思っている。

さて、「米寿の夢」となると、「なんぼ何でも、もうあかんで！ 残り時間がない」と思うのが普通である。だけど夢でなく何かやってみたいことはある。ここまで生きて来れた恩返しに、他人様の役にたつことをやろうと、一日一善100回はやれそうな気がするし元気になれそうだと思う。夢は大きくないがささやかな願望を抱くことは悪くないものの、行動してこそ叶うものだと自分に言い聞かせている。しかし「言うは易し行い難し」である。幸い私は今まで持ち続けてきた彫刻の夢は冷めていないのは有り難いと思っている。サラリーマン時代の仕事から決別して、それまで細々趣味でやっていたアートの世界を覗き仲間を増やし、第2の人生を走ってみようと思いをもち続けて20余年、今の自分を支えてくれたと実感している。

色々な夢の中から現在も続き、これからも持ち続けたい彫刻は、すでに「親父を語る」で書いたが、親父が指物師のもとへ丁稚奉公に出、その後、宮大工になった家庭で育った私は、親父に似てものづくりは子供の頃から好きだった。サラリーマン時代に出会った彫刻の先生から、休日に手ほどきを受けた仏像彫刻に魅了されて定年後本格的に始めた。そしてこの彫刻の分野以外で活躍する多くのアーティストにも出会え、刺激も受けながら様々な体験をしたことが夢への道を押し進めて行けた幸運に感謝している。

会社勤めの現役時代から始めた仏像彫刻は、余暇を利用した趣味の範囲だったが、先生の指導方針として定形の仏像彫刻でなく、重要文化財や国宝級の仏像の模刻から入ったので、素晴らしい作品に出会ったことが一層その気にさせられたといえる。よく仏像鑑賞に博物館や寺に出かけたり、仏像に関する本もよく読んだものである。

現在国宝に指定されているのは約1100点あり、そのうち彫刻は10%強ぐらいである。それらは全て、文化財として保護され管理されていて鑑賞も制限されている。それに対し

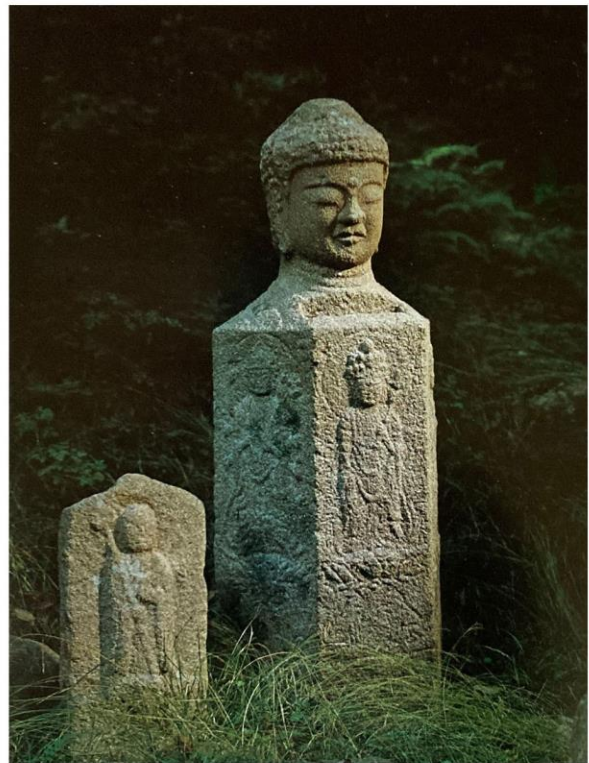
て、石造の野仏は全国的に存在し、信仰の対象にされて人々の生活の中に溶け込んでいるものも多いが、山野で風雪に晒されているものは断然多い。しかも古代から現代のものまで、仏の種類や様式、形状等千差万別である。

私が野仏に魅了され、山野を歩き周り、行きつ 戻りつし 探し回り、地元の人以外は知らない石仏探訪で、野放しになっている石造物から彫刻のモチーフとしてのヒントをどれだけでもらえたか数え切れない。国宝級の作品はその技術力と技工さにおいて素晴らしいが、直接手にとって鑑賞はできない。野仏は触れることもでき、制作時のノミ跡さえ確かめられる良さがある。冬、陽なたで温められた石仏に手を触れ、夏は木陰にある冷たい石肌に涼しさを感じ取れるありがたさは忘れられない思い出である。

今まで美術展に出品されている作品は大抵「手を触れないでください」と注意書が添えられていたが、最近は視覚障害者に彫刻や工芸品に手を触れても良い作品を制作し、障害者の作品への関心を高めようという動きがある。私が石仏に触れる好奇心とは違ってはいるかもしれないが、触覚による感動は共通のものだろうと思う。

今回、私は何度も訪れてきた思い出の石仏をご紹介したい。この2～3年足腰が弱くなって、山歩きが苦痛になってきた。あの石仏はどうなっているかな、あの山には他にも沢山在ったな、もう一度訪ねたいという願望が沸々と出て来るが、気持ちと体のバランスが難しくなってきた。しかしせめて撮り集めた写真を眺めて作品づくりに精を出し、私の作品に触れ喜んでもらえる作品を出品したいと夢みている。そして最後まで創ることに生きる喜びを持ち続けたいと願っている。

(1)奈良若草山の近辺に在る石仏である。六角柱で6面に仏の浮き彫りと、頂上に如来頭部を丸彫した仏頭石で、見事な美しさをとどめている。高さは約1mで室町時代の作品である。



(1) 仏頭石

(2) 奈良春日山から柳生街道へ抜ける山中に在って、地獄谷聖人窟と呼ばれる。石窟の中に3尊の磨崖仏で彩色され、鮮やかな朱や金箔が残り、約1.5m高さの線彫だが力強い。中尊は釈迦如来、向かって左は薬師如来、右は11面観音でそれぞれ制作時代が違い追彫りされている。中尊は東大寺の大仏に似て、蓮弁台に座して堂々とした坐像である。かつては修行者が住んでいたと伝えられていて、奈良時代後期の造立だが1200年の古さを感じさせない。さすがにこの岩石窟は保護柵がありよく見えるが入れない。



(2) 3尊磨崖仏

(3) この猿石は飛鳥の東に位置する高取城(標高584m)の山腹に鎮座している。高さ約1mの石像で、南北時代に山城築造の折に、飛鳥から運ばれた石の中にこの猿石が在ったといわれる。前回のKozoomのテーマ「不思議なもの」の中で紹介した、渡来人制作の猿石の一つだろうと思うが飛鳥時代のものである。私が初めて出会ったのは雪の降る寒い日で、剽軽な顔立ちは忘れられない思い出である。

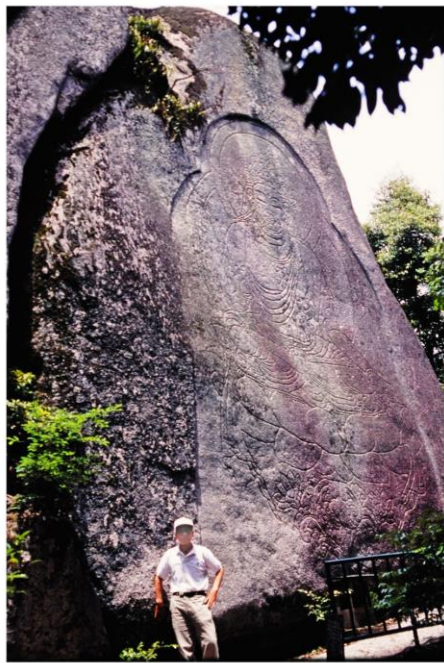


(3) 猿石

(4) 奈良の談山神社から西へ飛鳥に下る山中で何体かの石像を見つけ、石仏と記念写真を撮ったものである。右側は役の行者で左は地藏菩薩である。奥にもあるが写真には見えな



(4) 役の行者と他



(5) 虚空蔵菩薩像

い。共に目鼻立ちはさほど風化されないで残っているが、作風から見て江戸期のものだろうと思う。

(5) 奈良市から北へ木津川を遡っていくと笠置山があり、山を越えると柳生に入る。この笠置山山頂近くに巨大な岩窟がひしめいていて、岩肌に虚空蔵菩薩像の線彫がある。高さ約13mで天平の様式を伝える美しいレリーフは奈良時代の作と伝えられている。ノミ跡の深さは2cmぐらいだった。風雪でなめらかになっているが苔は無かった。惚れ惚れするような菩薩像である。

(6) 京都の伏見に在る黄檗宗の石峰寺は江戸時代の画家伊藤若冲ゆかりの寺



(6) 石峰寺羅漢像

で、裏山に様々な石仏が在るが、特に五百羅漢像の夫々は、つつい笑ってしまうほどの強面だが悩み多い面相である。若冲も見ながら水墨画や版画づくりをしていたであろうと想像し一層興味が湧いてきた。

(7) 京都嵯峨野のおたぎ念仏寺の羅漢像群である。戦後荒廃していたこの寺を彫刻家で仏師の西村公朝氏(1915~2008)が住職になって再興した。羅漢像の制作は素人を相手に指導し、10年間に1200体も境内に安置した。実に壮観で、現代版石仏群像であるが、この地は愛宕山や清滝川が迫っていて冬は雪が積もるし、湿度も高く苔が繁茂し易い。したがって新しい石像仏でも苔むしてすこぶる古仏さながらである。制作者は庶民達だから、亡き人を偲び供養に建立したので俗っぽい顔立ちの像が並んでいて親



(7) 念仏寺羅漢像

しみやすい。少々ありがた味さには欠けるが眺めていて飽きないので、しばしば訪ねることが多かった。

(8)私が還暦前に東京勤務を命ぜられて単身赴任し、浦安寮で生活していたころ、休日にあちこち歩き回っていた一つに川越市の徳川家ゆかりの喜多院へよく出かけた。徳川家光公と27世の天海大僧正との交流が密で、以来保護を受けていた寺院である。その境内に五百羅漢像がひしめいて在る。1800年前後から造像が始まったというから、ほぼ200年経った石像群で、一般庶民の作でないが、表情豊かな羅漢が日常生活の姿をリアルに表現していて、彫刻の素材になる石像がわんさと在りよく勉強させてもらった。その中から私なりに木彫のレリーフを制作したところ、寮内の談話室に長期間飾ってもらい皆さんの憩いの場になっていた。約50cm角の桂の木で彫ったものである。



[8]喜多院羅漢像から作品

以上、ここらあたりで石仏の話は終わりにしたい、切がないからである。今回は奈良・京都の近場の作品を取り上げたが、全国的にあちこち機会があれば石仏探訪をしてきたものである。日本人の心には古代からの神道と、仏教伝来の宗教が習合して、多くの人達は死生観を学び、慈悲の心が育てられた。この世の煩惱に救いをもとめ、山にこもって修行をする修行者もおれば、身近に亡き人を悼み、祈りを捧げる人達にとっては、仏像は祈りの対象として寺のご本尊に手を合わせ、路傍の石仏や野仏にも野花を供え幸せを祈ってきた。私のように仏像を美の対象として捉えている人間は罰当たりかもしれないが、私の制作した仏像に心動かしてもらえることができれば、こんなに素晴らしい夢はないと思っている。

令和4年8月 記